

2020年6月 国際放送番組審議会

2020年6月のNHK国際放送番組審議会（第670回）は16日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近のNHKの動きについて説明があり、「これでわかった！世界のいま」の内容について報告した。続いて、最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「Digital Detectives」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
副委員長	河野 雅治	（日本国政府代表・中東和平担当特使）
委員	岡田 亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
委員	鎌田由美子	（株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター）
委員	阪田 恭代	（神田外語大学外国語学部 教授）
委員	佐藤可土和	（クリエイティブディレクター、株サムライ 代表取締役）
委員	佐藤たまき	（古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授）
委員	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 （一財）日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長）
委員	中曾 宏	（株大和総研 理事長）
委員	平子 裕志	（全日本空輸株 代表取締役社長）
委員	村上由美子	（経済協力開発機構（OECD）東京センター 所長）

（主な発言）

<NHKおよび国際放送の最近の動きについて>

○ 「これでわかった！世界のいま」の番組SNSに掲載したCGアニメーションについて批判が寄せられたが、それに対して謝罪と対応策を発表したことについて説明があった。今回の事態が起こったのは、番組制作現場の品質を管理するレベルや意思決定のレベルに多様性がある人材が欠けていたからではないだろうか。外部の専門家の意見を聞くのは有益だと思うが、日本のメディアの中で社会的にとっても大きな影響力を持つNHKの番組制作の意思決定プロセスに、どこまで多様な視点を取り入れられる体制を作れるかが鍵だろう。

多様な視点とは、女性の視点や、あるいは日本人以外の多様な価値観を持つ人の視点かもしれない。そこに対応しないと、今後も同じようなことが起きる可能性がある。

NHKの番組制作の意思決定のプロセスに一步踏み込んだ対策を取らなければ、根本的な解決にはなかなかつながらないのではないかと懸念している。

(NHK側) 現場のチェック体制に甘さがあったと認識した。番組制作の意思決定の体制にもう少し多様性を持たせることは非常に重要なテーマになっている。ぜひ頂いた意見も参考にさせていただきたいと思う。

- NHKワールド JAPANでは、新型コロナウイルスをはじめ、政治などさまざまな問題について、情報発信していることがよくわかった。アメリカのみならず途上国で衛生状態が悪いところなど、多岐にわたって情報発信している努力には敬意を表したい。

また各所でNHKワールド JAPANの番組上映会を行なったとの報告があったが、具体的にどのような形で実施したのかを教えてください。

(NHK側) 番組上映会は通常、スクリーンがある部屋で大勢で見るものだが、今回は実施の形態を変えた。NHKワールド JAPANのウェブサイト内にあるオンデマンドのページから視聴してもらう形にした。参加者は1週間の間、24時間いつでも好きな時にそのリンクから番組を見てもらえるようにした。そして1週間後の週末に、オンライン上で制作者との対談や質疑応答をおこなった。

- 上映会をオンラインで開催することで、幅広い層に番組を見てもらえるようになったのか。

(NHK側) 離れた地域から参加する人が増えた。今後、新型コロナウイルスの影響が収まっても、この形式での上映会も継続したい。

< 「Digital Detectives」 (4月25日(土) 10:10 ほか) について >

- 非常に力作だと思う。ハードボイルドなタッチで、構成もよかった。近年の実例を取り上げて、非常に説得力のある番組になっていた。最近のハーバード大学の研究では、デジタルの衛星写真を見ると、中国の武漢で病院への往来が去年の夏頃から増えたのではないかということだった。公開されている情報をもとにした情報収集活動であるオープンソース・インテリジェンスには、利便性と怖さの二面性があることをよく捉えていた。

また、こうした活動がいわゆるフェイクニュースと闘う上での大きなヒントになるのではないかと期待できる。単に現在の状況だけでなく、これまでの活動ぶりも含めて深く説明し、わかりやすく番組を構成していた。非常にNHKらしい力作だと感じた。

- 複数の具体的なエピソードを紹介していた。インターネット上の公開情報を使って調査し、真相の解明に至るというストーリーそのものが、タイトルのおり探偵物語的な番組として非常に楽しめた。とても興味深くわかりやすい番組構成になっている

と思う。

ジャーナリズムは真実の解明と報道がその本質だとすると、まさしくこれはジャーナリズムの本質を問う題材だったのではないかと非常に好意的に見た。公開されたインターネット上の情報だけを使って、市民が自力で真実を追及することができるテクノロジーが存在することを知って非常に面白かった。

一方で、このようなデジタルテクノロジーについては、意図的にフェイク情報をでっち上げることも可能ではないかと思った。その場合、フェイク情報をどのように見分けるのかという懸念が出てくると思う。

今後はこういった公開されている情報の真がんを見抜く人材の育成、あるいは情報を公開する組織の倫理や道徳が問われる時代になってくるのではないかと。

- 実例が非常に多くすばらしい番組だった。知らないことも多かった。ただ、現実世界では、非常に無力感を感じる場面も多いのではないかと思った。カメルーンのケースやイランのケースは、真実を暴かれた側が非を認めたが、大半のケース、特に全体主義的なリーダーがいる国では、非を認めないだろうし、認めないと結局それ以上追及することはできないだろう。

そういうときに、このデジタルテクノロジーを駆使する人たちはどうするのか。結局のところ別の国家等がこの技術を活用しなければ対抗できないのが現実の社会だと思う。そのような無力感を視聴者に感じさせることも、この番組のもう1つの重要な意義なのかと思った。

でっち上げやフェイクニュースもあるので、真がんを見抜く目が必要だと思う。非難された国も、同様にSNSを使ってさまざまなプロパガンダ、あるいはプロパガンダに見えないように世界に影響を及ぼそうとしている。そういうところにも注目すべきではないか。

NHKはこの変化をどう受け止めているのか。足で稼ぐジャーナリズムというものは変容しつつあり、こうした新しい情報収集の方法が出てきている。例えばインターネット上の情報をもとに調査報道をするイギリスの市民ジャーナリスト集団「ベリングキャット」とNHKが連携する時代がいずれやってくるのではないかと。

- 非常にクオリティーの高い優れた番組だった。8つのエピソードが取り上げられていたが、丹念に、インタビュー、映像、そしてデータを組み合わせて、それぞれのストーリーに説得力を持たせて構成されていた。これだけ情報があふれている時代に、「真実」が誰によって、どのように作られているのか。そしてその「真実」をどう見極めるかが非常に難しい時代になったと、この番組を通じて改めて痛感させられた。

この8つのエピソードでは、「不都合な真実」をジャーナリストたちが暴いていく展開だった。しかし彼らはインターネット上の情報は正しいという前提で使用していたと思うが、それは本当に真実なのか、情報操作されているおそれはないのかとも感じた。「ベリングキャット」のメンバーが良心に基づいて「真実」を暴こうと動いているところを捉えていたが、一方で、こういう人たちのパソコンやウェブサイトなどがハッカーなどに乗っ取られるといった可能性はないのか。そういう意味で、インターネットから得られた情報を真実だとして安易に提供することは非常に難しいということ深く考えさせられた番組だった。

- すごい番組だと驚き、吸い込まれるように見た。インターネット上の地図情報やGPSによる位置データ、個人のSNSの情報、そして並外れたデジタルスキルを持つジャーナリストという3つの要素が重なることによって、以前は不可能だったことが可能になってくる。まさに今はこういう時代なのだと思う。

- こういう調査をする人がいることは、さまざまなメディアなどを通じて断片的に知っていたが、今回まとまった一つの番組として非常に見応えがあった。「Digital Detectives」に限らず、ジャーナリストは、情報を統制したい側にとってはとても目障りなので、どういう人がどういう技術を持っているかを特定できる状態になると、身の危険にさらされてしまうのではないかと少し心配した。

番組を制作する上でこういうジャーナリスト、もしくはジャーナリストに情報を提供する情報源となる人々を守るために工夫していることがあれば、教えていただきたい。

- 本当に見応えがあり、映画を見ているようで迫力がありおもしろかったが、よく取材を受けてくれたと思った。番組に出演することで顔などが公開されてしまい、本当に命の危険はないのかと思った。しかし、改めてこの番組を見ると、今の社会は、多くの情報がオープンになっており、誰もがチェックされているとも言え、こういう「ベリングキャット」のような人たちも、さまざまなメディアが取材することで、ある意味チェックされることになるのではないかと。ジャーナリズムがジャーナリズムをチェックすることがうまく作用すれば良いと思う。

今後、デジタルの世界は情報の入手方法が、さらに重要になっていくと思うので、NHKはこういう番組をぜひこれからもどんどん作ってもらいたい。

- とてもおもしろくよくできた番組だった。ただし大きな課題が1つ、この番組の中では、全く触れられていなかった。それはプライバシー侵害についての問題だ。国際機関でも、この問題については、盛んに議論しており、デジタル技術を使った調査や他者からの監視行為に対しては人権擁護活動をしている団体からも大きな懸念が示されている。監視行為に伴うプライバシー侵害の問題は、実はまだ国際的な協定が成立していないのが現状だ。

対象となった人物の名前まで特定できるほど、デジタルデータが出回っている状況で、犯罪者の捜査などを対象に使うことを、番組ではクローズアップしていたが、それ以外にも使われ方はいくらでもあると思う。プライバシーについての問題を深く掘り下げるのは難しかったかもしれないが、この課題について触れなかったことが不思議だった。

- 質の高い番組だ。デジタルジャーナリズム、オープンソースに基づく市民ジャーナリズムの最前線をグローバルな視点から紹介する有意義な番組だった。デジタル人材はサイバー安全保障のみならずジャーナリズムでも活躍できると思う。日本のデジタルジャーナリズムを後押しする効果があることが期待される。

なお、字幕のフォントについてだが、海外の番組は文字フォントがくっきりしているものが多いが、NHKの国際放送の番組は、例えば人物名などが、とてもシンプル

なフォントで表示されて、印象が薄くなり映像にも埋没して、読みづらいこともある。ぜひ字幕のデザインを工夫してほしい。

- 「Digital Detectives」というタイトルは、当初どういう内容なのかわからなかった。だが、番組の中で「ベリングキャット」などの解析手法が非常にわかりやすい形で解説されたので、具体的なイメージがよくつかめた。オープンソースから様々な真相に迫ることができるのは、率直に言って新鮮な驚きで非常に興味深く視聴した。

ほかに3点感じたことがある。1点目はジャーナリズムの手法の変貌だ。ジャーナリズムが真相に迫るといふ役割は不変だが、伝統的には足で稼ぐ地道な取材方法をとっていた。それがデジタル時代に大きな変貌を遂げつつあることはよく理解できた。海外の大手放送局や新聞社など、既存の報道機関までもがこういう体制を整えていることもわかった。この点について、NHKをはじめとした日本の報道機関は、現状はどうなっているのかが気になった。日本の報道機関も、「Digital Detectives」によって取材されたニュースをやがて放送することになるのだろうか。

2点目は、デジタル時代のジャーナリストの活動や成果をこの番組で見ると、やはり真相に迫る報道の力は、報道の自由が保証された民主主義の中で育まれるものなのだと思えた。

3点目は、番組名である「Digital Detectives」の手法のすごさは強調されていてよくわかったが、他の委員が指摘したようにプライバシーの問題など、課題や問題点、そういった影の部分も紹介されていれば、よりバランスが取れた番組になったかもしれない。

また、番組の最後で、次の世代を担う若い人の教育の必要性についても触れている点は、大変啓発的でよかった。日本国内でも放送したことは非常によかったと感じた。

- 大変見応えのある番組だった。特にナレーションが番組の雰囲気ととても合っていて、番組の作り方や盛り上げ方についても非常に上手だと思った。

課題は、情報の信頼性がどこまであるのかという点だ。インターネット上にフェイクのデータが仕込まれていたら、それを事実として認めてしまうという問題もあり得るのではないか。これはおそらくジャーナリズムの考え方と、アカデミズムの考え方との相違もあるかもしれない。例えば以前、アカデミズムの世界では、インターネット上にある情報は信じてはならないと考えられていた。文献として引用する場合でも、必ず図書館などで、原文を調べることで、インターネット上に流布している情報は、削除される可能性があると考えられていた。

またインターネット上の情報を信頼できるかどうかについては、アメリカと日本とでは感覚に違いもあると思う。アメリカでは、インターネット上の百科事典サイトに対する信頼が大きいことを知って非常に驚いた。日本では、間違いだらけで信じられないものだと考えられている。

- (NHK側) 身の危険にさらされてしまうのではないかと懸念する意見があったが、たとえば「ベリングキャット」のエリオット・ヒギンスさんは欧米ではすでに著名な方で、様々なメディアに出演しながら、世界中を飛び回っている。安全面ではいろいろ対策をとっていると聞いている。

日本の報道機関で、海外のように本格的な形でデジタル情報をもとに真相を追及する手法をとっているところはまだないと思う。近い将来、この手法を使って日本の問題を追及する番組を作れないかと考えている。

インターネット上の情報の信頼性についての指摘もあったが、彼らは日々フェイクニュースと闘っており、そのための技術開発にも取り組んできた。ただ、番組では時間の関係上、そこまで紹介できなかった。

プライバシー侵害については、例えばマレーシア航空機事件では、インターネットで公開されているオープンソースをもとに取材している。もちろん放送するにあたっては、顔や名前を出すことは慎重に検討しなければならない。番組では、個々の事例を紹介することを優先したため、触れなかった。いただいた貴重な意見は今後の参考にしたい。

2020年5月 国際放送番組審議会

2020年5月のNHK国際放送番組審議会（第669回）は19日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「GLOBAL AGENDA」、「Asian View」、「Preventing the Spread of the New Coronavirus」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤可士和	(クリエイティブディレクター、(株)サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(経済協力開発機構 (OECD) 東京センター 所長)

(主な発言)

<最近の国際放送の動きについて>

- 新型コロナウイルス感染拡大の状況下で、NHKワールド JAPANのウェブサイトでは、ウイルスに関する情報をQ&A形式で提供していると説明があった。それは非常に重要なことだ。さらにそのQ&Aを多言語化しているとのことだが、続けていくのは大変な作業ではないか。

(NHK側) 1日1、2本の原稿を可能な範囲で作成している。4月後半からは、ラジオ第1放送で三宅民夫キャスターが司会を務める「マイあさ！」で非常に有益な情報が紹介されていたので、今はその原稿を活用している。

- 事態が刻々と変化しているので、常に最新の情報が求められていると思う。対応していくのは非常に大変だと思うが、ぜひ続けてもらいたい。

< 「GLOBAL AGENDA」 World Lockdown: Battling the Pandemic

(4月11日(土) 10:10 ほか) について>

- 新型コロナウイルスの問題が今後どうなるかということは、世界が注目するテーマだ。時々刻々と変化するものが対象なので、誰が何を発言するかが非常に注目される。出演する専門家、有識者の選出や放送するタイミングが非常に重要な番組だ。

モデレーターの榎原美樹記者の歯切れのよい進行がよかった。質問の順番も、だんだん深くところに入って行き、最後は皆さんからメッセージを求めるという構成も、大変わかりやすかった。この番組は4人の有識者がわかりやすい発言をしていたのが印象的で、これは世界中の視聴者にとって、非常に有益な情報だったのではないかな。

日本の番組なのでパネリストに日本人を選ぶのはいいと思うが、日本以外は香港とイギリスの人だった。この選び方がいいかどうか。例えば台湾など、ウイルスの封じ込めに比較的早く成功したとされる国や地域から選ぶ方法もあったのではないかな。もしくは新型コロナウイルスの対策に苦心しているアメリカでは楽観派と悲観派の人がいると思うが、アメリカの人をパネリストに選べば、多角的な意見が聞けたのではないかな。パネリストの主張が皆同じに聞こえた点が少しもったいなく感じた。
- 複数の有識者が一方的に話して終わるのではなく、お互いに意見を交わす形の番組をもっと積極的に制作してほしい。

また、英語ネイティブではない人たちも見ることを前提として、英語の字幕を付けてほしい。英語ネイティブではない出演者の発音は聞きづらいこともある。英語の字幕を付ければ発言内容がもっと正確に伝わるのではないかな。
- モデレーターがとてもすばらしかった。パネリストもそれぞれすばらしい方だと思うが、表現のしかたは違っていても、主張の方向性があまりにも同じだった。もう少し意見の多様性が感じられる番組制作のしかたがあったと思う。

日本のパネリストと香港のパネリストは、それぞれ専門が感染症の分野で、すばらしい経験を持っており、経験も豊富な方々だったが、残念ながら英語力という点においては、圧倒的に香港のパネリストの方がレベルが高かった。日本のパネリストも達人だったが、同じ内容を言っているにも関わらず、語彙の点で圧倒的なレベルの差を感じてしまう。
- 意見が一つの方向に集約していったとは感じたが、どこの国もロックダウンや外出自粛、そして免疫の有無を調べる点などについては、おそらく結論は一緒だろうから、同じ方向に行くのだろう。

今回はパネリスト全員が医療の専門家だったが、医療といっても感染症や検査手法など、専門分野は分かれているはずだ。同じ方向に議論が向かうのではなく、もう少し変化があってもよかったのではないかな。

放送時間の50分の中に、過去のスペイン風邪の話も入っていたのは非常に幅が広くてよかった。ただ、過去の失敗や解決策への言及はかなりあっさりとしており、もう少し深く触れてもよかったかもしれない。

- 新型コロナウイルスに関する報道番組には、数多くの専門家が出演している。この番組に出演した人たちは皆、第一線の専門家だと思うが、なぜこの4人にしたのか、ゲスト選出の方針のようなものがあれば、教えてほしい。

香港大学のガブリエル・レオン医学部長のコメントはよく整理されていて傾聴に値するコメントだった。ウイルスに対する免疫が社会に定着するまでは、抑制と緩和のサイクルを繰り返しながら長期間対応していくことが必要だと説明していた。このコメントから1か月後、まさに世界はそこに向かおうとしており、先見性があったと思う。レオン医学部長は専門である医療分野以外についても、例えばこの状況で浮き彫りになってきた格差の是正などが大きな課題であると発言していてまさにそのとおりだと思った。

各パネリストの主張が基本的に同じ方向を向いていたのはそのとおりだと思うが、違いもあった。例えばパンデミック制御のカギを握るワクチン開発までの期間について、東京大学医科学研究所感染症国際研究所の河岡義裕センター長は、副作用のない安全なものを作るには2～3年かかると言っていたが、WHOの進藤奈邦子シニアアドバイザーは1年～1年半と言っていた。専門家によってもこれだけの違いがあるのかと、大変興味深かった。

ぜひこの続編を制作してほしい。経済面では新型コロナウイルスによる影響をリーマンショックと比較する報道が多いが、単純に比較はできないかなり異質のものだと思う。リーマンショックは金融システムが崩壊して経済に打撃を与えたが、今回は順番が逆で、経済の危機が先行している。今後、企業倒産が続発して金融システムが持ちこたえられなくなると、もっと深刻で本格的な経済・金融危機に変異してしまうのではないか。

榎原記者が言っていたように、財政も金融ももともと限界以上の状態であるにも関わらず、人類共通の敵とも言えるウイルスとの戦いであるがゆえに、政府が大盤振る舞いすることが支持されている。しかし、これは将来的に国民にツゲが回るものだ。だからそれを納得できるものにするためにも、効果的な政策を評価する目と、ポストコロナの経済と社会のあり方についてビジョンが必要だと考える。この点を番組で取り上げるべきだと思う。

いずれにしても日本は過去30年間、さまざまな経済危機だけではなく自然災害を経験してきた。経験から得た教訓を新型コロナウイルスに挑む世界にどう生かせるか。そこがポイントだと思うし、そうした視点を持つことによって日本の国際放送には、ほかにはできない形の情報発信ができるのではないか。

- 新型コロナウイルスについての報道が急増し、「新型コロナウイルス」という言葉が入っていないニュースがほとんどない状況になっている。

新型コロナウイルスの感染拡大が一段落した後に番組制作者の役割は何なのかと考えると、1つは今回の「GLOBAL AGENDA」のようなディスカッションの番組やドキュメンタリー番組といったものが主流になっていくのではないか。この「GLOBAL AGENDA」は4月11日に放送されたものだが、1か月以上たっても見ても価値が減じていないと感じる。とても普遍的で良質な番組だ。何か月たっても価値のあるこのような番組を作るべきだ。

この番組の良かった点は、第1に、新型コロナウイルスをめぐってはさまざまな流

言飛語や、人の耳目を引くコメントが時折表れては、人に不安を与える。しかしこの番組は科学的な裏付けのある議論を展開しており、また歴史的な視点からの検証もあり、事実を重んじた議論で価値があると感じた。

第2に、今回のパネリストは極端に楽観も悲観もしておらず、科学的知見に則った意見を冷静に述べていた。最後は人々の連帯の重要性を指摘しており大変印象的だった。

このような状況は今後も続くと思うが、長期間価値が変わらないドキュメンタリー番組やディスカッション番組こそがわれわれの心のよりどころになるのではと思う。

- この番組が放送された4月11日時点で、世界中の人々が最も関心を持っているテーマを専門的見地からの非常に深い議論がわかりやすく展開されていてとてもよかった。

しかし、50分の放送時間は少し長く感じた。それには理由が2つある。

1つは、膨大な情報や新しい知見が提供されはじめた5月時点でこの番組を見ると、あまり新しいと思える情報はなく、ニュースや情報の賞味期限について考えた。

2つ目の理由は、番組のスタイルにあると思う。新型コロナウイルス対策でパネリストがリモート出演することは、ソーシャルディスタンスに配慮したやり方だとは感じるが、他方、以前見た「GLOBAL AGENDA」ではパネリストが丁々発止と討論していた。そうしたスタイルに比べると、今回は、若干、単調になりがちだ。もっと視覚に訴える映像やフリップを途中で挿入するなどすれば、視聴者を引きつけやすかったのではないかな。

今後もこの「GLOBAL AGENDA」で、例えばワクチンの開発状況や、各国がこの問題に取り組む手法を比較しながら、それぞれの長所と短所を取り上げてほしい。日本ではロックダウンは行われず、緊急事態宣言を出すのも遅かったと感じたが、死亡者数はあまり多くない。その理由に諸外国が関心を示していると聞いている。日本と他国の戦略の違いと結果の考察や、グローバリゼーションとパンデミックとの関係など、もう少し深掘りしながら、継続的に取り上げてほしい。

医学の専門家である香港のパネリストが、グローバリゼーションとパンデミックとの関係など、経済的な観点からも話していたが、そういう分野に話が及ぶのであれば、やはり経済の専門家もパネリストに加えるべきだと思った。

- 番組の制作自体が困難な状況になっていることを考えると、NHKをはじめ報道やテレビ制作に携わっている人は本当に大変な苦勞をしていると思う。例えばトーク番組なら今後どう制作していくべきか、ここで改めて考えなければならない。

モデレーターだけがスタジオにいて、パネリストは並べられたモニターを通して番組に出演する演出も、おそらく2、3年後には「昔、こんなことをやっていたよね」と言いたくなるほど相当アナクロなものに見える時代が来ると思う。今後、撮影ができない、人と会えないという作り手の制約を視聴者に感じさせないようにするべきだと思う。討論の内容がきちんと理解できる見せ方をどう工夫していくべきか、NHKが放送業界を引っ張って行ってほしいと思う。

生放送では話の内容にあわせて即座にテロップや字幕を表示するのは難しいかもしれないが、編集してから放送するのであれば、例えば重要なキーワードを美しいフォ

ントで提示するなど、様々な見せ方が考えられるのではないかと。

- パネリストによって音声や画質にばらつきはあったものの、比較的是っきり話しており、顔や画面の大きさが揃っていたからだと思うが、普通にテーブルを囲んだディスカッションのような感じで、違和感なく見ることができた。

専門的な話が多く、とても勉強になる番組だと感じた。同時に、パネリストの顔を見ながらひたすら議論を聴くだけで、途中で疲れてしまい集中力が切れがちになった。もう少し関連する画像を差し挟んだり、専門用語は字幕などを使って説明したりと、工夫したほうが理解の助けになったのではないかと。

出演者の名前のローマ字表記が気になった。NHKの放送では日本人の名前をローマ字で表記する際は、姓を先に書くように変更したそうだが、イギリスと香港の方は名前が先で姓が後に表記されていた。日本人の名前はこの番組を視聴する外国人から見ると、おそらくどちらが姓か名か、わからないのではないかと。モデレーターの方が名字に敬称をつけて呼びかけていたので、どちらが姓かはある程度把握はできたが、視聴者サービスの観点から、どちらが姓であるかわかる表記があればいいと感じた。

- 専門性の高い有識者を集めた点は評価に値する。科学や医学の常識を無視したある種の情報が頻繁に発信されているので、正しい情報を伝えることが極めて重要ではないかと思って見た。

以前視聴した「GLOBAL AGENDA」はパネリストが全員男性だった。今回は、もちろん専門性を重視することが前提だと思うが、パネリストに女性いた点はよかった。

- 榎原記者の進行がすばらしかった。パネリスト4人の選出がとてもよかった理由は、それぞれにきちんとした主張があり、限られた時間の中で凝縮したメッセージをひとつも無駄のない形で伝えられていたからだ。これは本当に日本が誇る国際放送の1つのモデルになっていると確信した。次は経済をテーマに番組を続けてもらいたい。

(NHK側) NHKでは日本人の名前をローマ字で表記する際、公文書などの表記も踏まえて、3月30日から基本的に姓・名の順にしている。ただし出演者本人の意向も考慮しており、強制することはしていない。

この番組は4月7日に収録し、4月11日に放送した。アメリカの約350あるPBS局に放送を提供しているAPT (American Public Television) の担当者がこの番組を見て放送することを決めたと聞いている。番組は多くのPBS局のメインチャンネルで放送され、いち早くアメリカの視聴者にも最新の情報を発信することができた。

(NHK側) 委員の疑問点は3点あったかと思う。1つはパネリストの選出方法と意見が同じ方向を向いてしまった点について。2つ目は内容について。そして3つ目は今後の予定についてだ。

パネリストの選出は、企画段階では「インフォデミック (情報の感染拡大)」について討論できないかと考えていた。今回パネリストとして出演

していたイギリスのノッティンガム・トレント大学のディングウォール教授はその分野の専門家で、様々なデマが飛び交う中で、人はどのように対応していくのかに関して発言していただきたいと考えた。ところが事態はどんどん深刻化し、ロックダウンへの対応を議論する段階へと進んできた。そのため、議論のテーマを転換することにした。

転換後の人選に時間がかかったため、結果的に意見が重なる出演者となってしまったかもしれない。人選にあたっては男女比も考慮し、討論番組にふさわしい異なる主張をもつ方に出演いただきたいと毎回考えている。短い時間の中でも調整を続ける努力をしていきたい。

内容に関しては、いろいろな国の方針の違いをもっと率直に討論できたらいいと感じている。引き続き、この新型コロナウイルスをテーマにして番組を作ることを考えている。リモート出演で討論すると、モデレーターとの1対1の対応で終わってしまう場合も出てくるが、モデレーターがもう少しパネリストの間に入っていき、討論に導く役割を果たすことができればよいと思う。

今後は、グローバリゼーションとパンデミックとの関係、経済への影響、拡大した格差への対応、外出自粛の中で、変わりつつある生活様式などについて、もっと専門家の意見を紹介できればと考えている。

発言内容を字幕表示する点については工夫していきたい。

(NHK側) 字幕について補足すると、この番組はNHKワールド JAPANのホームページで、1年間VODで視聴可能で英語の字幕を表示できる機能を付けている。また番組内容を書き起こしたテキストを掲載している。

(NHK側) この番組はアメリカのPBS各局でも放送や配信されているが、字幕の表示・非表示を切り替えられるクローズドキャプションの形で字幕を出している。

< 「Asian View」

(ラジオ国際放送 週間ニュース番組 4月3日(金) 18:30 ほか)

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」

(ラジオ国際放送 ミニ番組 4月29日(水) 13:40 ほか) について>

○ 「Asian View」はラジオの番組なので、映像がなくても理解できるテーマが求められていると思う。今回、ニュースとインタビューを組み合わせで5分とコンパクトに構成していた。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、感染経路をいくつか説明していて、そのひとつとしてマイクロ飛沫感染を取り上げていた。これをラジオの音声だけで解説していたが、まるでどこかに映像があってそれを見ながら解説をしているかのような感じで、リスナーは若干とまどいを覚えたのではないかと。

感染症の専門家である日本感染症学会の舘田一博理事長の解説を英語に翻訳したものを、ただナレーターが棒読みしている感じがした。また、少し長めの音楽がところどころに入って、その間の取り方に違和感があった。4月29日の放送だが、だいたいが知っているような内容で、この時点でマイクロ飛沫感染を説明するのは、もはや新しさが無いのではないかと。

- 緊急事態宣言下でラジオの聞き方が変わってきているのではないかと思う。日本では車の中でラジオを聞くことが多いと思うが、今はスマートスピーカーを持っている人もいないのではないかと。

スマートスピーカーに「NHKラジオのニュースを聞かせて」と言うとNHKラジオの英語ニュースが流れた。それは素晴らしいことだ。しかし「Asian View」や「Preventing the Spread of the New Coronavirus」と個別の番組名を言っても出てこなかった。人々の生活様式が変わってきており、ラジオの聞き方も変わってきている中で、どのようにNHKの英語のラジオ番組を多くの人々に聞いてもらえるかを考えないといけないタイミングにあるのではないかと。

- 「Asian View」は全く違和感がなかったが、「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、画像がないと聞いていてもわかりづらかった。英語力の高くない人が聞いたときに、視覚的要素があるかないかで、内容の理解度は大きく変わる。ラジオに向いているテーマと不向きなテーマがあるのではないかと。

- 「Asian View」は海外のリスナーを念頭にコンパクトに大変わかりやすく出来事をまとめていると思った。国際感染症センターの大曲貴夫センター長が語る論点も、なぜ日本の感染者数が他国に比べて少ないのか、あるいは日本における治療薬の開発状況はどうなのかなど、多くの人々が知りたい点に絞っていて非常に興味が持てた。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、感染防止にとっても実践的で役に立つ情報提供をしている。新しい感染経路として、空中を20分間も浮遊している0.01ミリ以下のマイクロ飛沫があることは、多くの人が認識をしておくべきことではないか。そしてこの感染経路を防ぐため、近距離での対面や対話の回避、換気、マスクの着用の必要性を論理的に説明していて役に立った。

- 非常に実践的な番組だった。特に「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、マイクロ飛沫への対策について日常生活で役に立つような情報を短時間で紹介していて、価値のある内容だ。実践的な情報は常に取り上げていくべきだ。これだけ日々新型コロナウイルスに関する報道があっても、これまで知らなかったような情報をはじめて知る人は必ずいる。こういう番組は続けていくべきだ。

「Asian View」は、日本人出演者の英語が聞き取りにくかった。また、若干抑制的な発言をしている印象を受けた。これは少し残念だ。政府の見解においても日本のやっていることは世界にアピールできるようなものもあるので、そこは強い姿勢を示してもらいたいと思った。

- 「Asian View」は短い時間で非常に効果的に質疑応答が行われていた。特に多く

の人が関心を持っているPCR検査の実施が日本では少ない状況をわかりやすく説明
してよかった。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」の飛沫感染については、以前、NHKの番組の実験で飛沫がどのように飛ぶかを見ていたため、映像がないラジオ番組でも理解できた。こうした情報はぜひ多言語に翻訳して多くの国に伝える
るといいのではないか。

○ 今は情報への接し方が大きく変わり、今後は視聴者の情報の取り方も変わっていく
と思う。だから、まずはこれまでのやり方を疑ってかかり、番組名の付け方や、どの
ようにラジオが聞かれているのかなどを考えないと、せっかくいい番組を作っても聞
いてもらえないのではないか。

○ 「Asian View」も、「Preventing the Spread of the New Coronavirus」
も、映像がないのに、これほど情報が伝わるのかと感心した。

少し気になったのが、「Asian View」の後半のインタビューで大曲センター長が
話しているとき、途中で人の声が少し入っていた点だ。ラジオが混線したのかと気にな
った。原因がわかっているのであれば教えてほしい。

○ 「Asian View」は映像がないぶん、音声に非常に集中して聞くことができ、テン
ポも私には合っていて聞きやすかった。放送当時はもちろんこれが最新情報、あるい
は不可欠な情報だったと思うが、どのような頻度で、あるいはどのようなタイミング
でこういった情報発信を更新しているのか。その方針があるなら教えてほしい。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、非常にNHKら
しい優れた情報番組だ。おそらくマイクロ飛沫について警鐘を鳴らした世界でも最初
期の番組だと思う。国内放送のテレビ番組でも見ており、知人たちの間でもSNSで
かなり広くシェアされていた。それだけ評価されていたのだと思う。確かに映像がない
ので理解するのがやや大変かもしれないが、意外と気が付いていないところになん
か高いリスクが潜んでいることを知らせていた。その内容は評価したい。

○ 5分間でこれだけ充実した情報を伝えたのはとてもよかった。ただ、例えばPCR
検査の実施数が少ないことに関する答えはあれでよかったのかと気になっている。そ
れから番組中に別の人の声が入って来てしまった点は私も気になった。生放送では仕
方ないのかもしれないが、少し残念だ。

「Asian View」は音楽が少し長すぎたのではないか。メッセージが重要なだけに、
あまり必要でない音楽はできるだけ短くしたほうが、集中度が高まるのではないか。

(NHK側) 欧米ではスマートスピーカーが普及していることもあり、“音声サービ
ス革命”ということも言われている。それを踏まえて、これまでの短波中
心のラジオサービスに加え、よりリスナーに広く届ける方策がないかと考
え、去年11月からNHKはNPR(非営利・公共のラジオネットワーク)
との連携をはじめた。テレビで関係の深いPBSの中には姉妹局として
NPRを持っているところもある。NPRの担当者と直接打ち合わせをし

ながらこういう形を見つけ出していった。スマートスピーカーなどを介して、さまざまな音声ニーズにこたえる形のサービスをさらに進められないかと考えている。

(NHK側) まず「Asian View」だが、この4月3日の回は大曲センター長に時間の合間をいただいて、放送直前に録音しすぐに放送する、つまりほぼ生放送に近い形で収録して放送したものだ。ほかの人の声が入ってしまったのは、キャスターやディレクターの声が入ってしまったのだろう。指摘は今後の番組制作の参考にする。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、4月29日時点で新しい内容ではないという指摘があったが、海外のリスナーに向けて、マイクロ飛沫を説明したことはあまりないのではないかと考え放送した。

今後どのように番組を制作し、情報を更新していくかという点について言うと、ラジオスタジオはとても小さいので、番組収録をふつうに行うと、いわゆる“3密”状態になってしまうという課題があり、スタッフの人数をどう減らしながら番組を制作するかについて、試行錯誤している最中だ。

「Asian View」は今後、基本的にはポッドキャストをするとスマートスピーカーにそのまま流れていく仕組みにしていきたい。「Asian View」と声で指示すると番組を聞くことができるようにしたい。

「Preventing the Spread of the New Coronavirus」は、権利処理上の課題があるので、すぐにポッドキャストやスマートスピーカーでの配信に対応するのは難しいが、今後、方法がないか検討を続けたい。また多言語での展開も考えたいと思っている。

2020年4月 国際放送番組審議会

2020年4月のNHK国際放送番組審議会（第668回）は21日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Barakan Discovers TOHOKU: The Lost and the Living」、「FACES How I survived being bullied」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
副委員長	河野 雅治	（日本国政府代表・中東和平担当特使）
委員	岡田 亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
委員	鎌田由美子	（株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター）
委員	阪田 恭代	（神田外語大学外国語学部 教授）
委員	佐藤可土和	（クリエイティブディレクター、株サムライ 代表取締役）
委員	佐藤たまき	（古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授）
委員	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 （一財）日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長）
委員	中曾 宏	（株大和総研 理事長）
委員	平子 裕志	（全日本空輸(株) 代表取締役社長）
委員	村上由美子	（経済協力開発機構（OECD）東京センター 所長）

（主な発言）

<最近の国際放送の動きについて>

- ニュースで、緊急事態宣言下で継続されるサービスを報じる際、「銀行サービス」という用語を用いることが多かったかと思うが、これは「金融サービス」としてほしい。緊急事態宣言のもとにおいても、基本インフラとして金融サービスは継続的に提供され続けなければならない、その場合の金融サービスは銀行だけではない。現金を輸送する人、保険、証券取引所、資産運用、株や為替、債券のディーリングをする人たちなどは実際に出勤をしなくてはならない人たちだ。
- 日本のメディアは、特にニュース番組など何人かが画面に映る場合、ほかの国に比べると配慮がなさ過ぎると思う。明らかに3密状態のスタジオに出演者が並んでいることがある。
NHKはそういうことに関して率先してモデルになるよう社会から期待されていると思う。今後も、パンデミックやほかの危機的な状況を迎えたときに、どういうメッ

セージをどういう形で伝えるか、メディアの姿勢を示してほしい。

- 日本語は非常にわかりづらいところがあり、主語と述語がつながっていないことがある。政府の新型コロナウイルスの話も修飾語が多く、日本で働く外国人の人々が、細かい話になるとわからない部分もあるかもしれない。国際放送を通じて、政府の様々な施策をわかりやすく伝えることも、NHKの仕事としてますます重要になってくるだろう。
- 日本における外国人への情報提供は軽視されがちなので、英語以外の言語でも情報発信に取り組んでいることを高く評価したい。
多言語番組は教育コンテンツとして活用できるようにしてほしいという社会的なニーズがある。可能な限り、NHKの番組はネットでもアクセス可能な形にしていきたい。

< 「Barakan Discovers TOHOKU: The Lost and the Living」

(3月8日(日) 8:10 ほか) について>

- 大変よい番組だった。この番組から感じたことは、死者のことを忘れなければその死者は残された者の中で共に生き続け、また残された者が生を全うする上で死者との思い出が力となることだ。東北の人々の間に根づいている死生観だと思った。番組はそのような死生観が育まれた背景を番組ナビゲーターのピーター・バラカンさんが東北を実際に訪れて探っていく構成だが、非常に理解しやすい構成だった。はじまりと終わりに東日本大震災のエピソードが紹介されていた。番組冒頭のタクシー運転手が話す幽霊の話は、視聴者を効果的に番組に引き込むのではないかと感じた。また最後に震災で家族を失った人の言葉で締めくくられており胸を打った。東北の人々の死生観が今日にも脈々と継承されていることが感じられた。
番組の中盤には、遠野地方のシーンが入っていたが、遠野は民話の里として非常に有名だが、遠野に伝わるかっぱが、宝暦の大飢饉で間引かれた赤ちゃんを忘れないために生まれた存在であったという話は、非常に悲しい背景だと驚いた。
なぜ東北でこのような死生観が生まれたのか。番組の中で東北学院大学の金菱清教授が、阪神・淡路大震災のときには幽霊が出たという話はなかったと発言していた。その違いは、美しくも厳しい東北の自然と関係があるのだろうか。東日本大震災の後、お見舞いのために三陸沿岸の被災地をまわった際、妻を震災で亡くして遺体も見つからない方がいたが、同僚たちとの会話で、いまごろ奥さんはアメリカをゆっくり旅しているよ、とか、飲み過ぎないようにと奥さんは心配してるよと、まるで生きているかのように語っていた。その会話に私はどう加わるべきか、当惑した覚えがあるが、今回の番組を見て、あの時の会話に東北の死生観が反映されていたのだと初めてわかったような気がした。
- 映像が非常に美しく、また内容も深かった。毎年3月には東日本大震災から何年目という節目の番組が作られるが、これまでの番組とは、かなり視点の違った番組だと

感銘を受けた。番組全体の感想として、映像の美しさ、内容の構成、そして江戸時代までさかのぼった東北の厳しい状況を描いていた点を高く評価したい。

しかし公共放送が心霊現象を番組で扱うことが、外国でどう受け止められるのかと、やや疑問に感じた。

- 映像もすばらしくきれいで、とてもおもしろかった。

NHKでこのような幽霊の話を取ったことにまず驚いた。基本的にはとてもいい番組だったと思う。日本のこうした死生観や、津軽地方にある川倉賽の河原地蔵尊のシーンは、海外の人だけではなく、日本人が見ても驚く映像で大きなインパクトを感じた。

新型コロナウイルス感染拡大の時期に死生観を取った番組を見たので様々なことを考えたが、こういう切り口で日本の文化を紹介するのは非常に興味深い試みだ。

子どもの間引きの歴史と関係しているという非常にシリアスな話が、かっぱという妖怪を生み、近年ではとてもかわいいキャラクターに昇華されている。それはある意味、非常に日本的だと思う。例えば間引きされた子どもの霊ではないかと言われていた座敷童子も非常にかわいい妖怪として扱われている。「かわいい」と「こわい」の紙一重、表裏一体な点も日本の文化として非常におもしろいと思う。それもあわせて紹介すれば、番組がより深まったのではないか。

- 単なるエピソードの紹介とそれを聞いた感想だけではなく、歴史的な背景、あるいは民俗学の観点も取り入れて解釈していたのでとても見応えがあった。

- すばらしい番組だ。日本をよく知るバラカンさんが4つのエピソードで東北を調べているが、自然の映像がすごく美しく、BGMや効果音も非常に印象に残った。この4つのエピソードがうまく連結して、1つのすばらしいストーリーができています。最初にタクシー運転手が語る幽霊の話があり、ここで東北の人たちが死者に寄り添う風習があるのはなぜかと疑問をまず持つ。そこから津軽、遠野、宮城とたどっていく。どのエピソードでも昔の東北地方の子ども、女性、貧困者など社会的弱者の死後の幸せを祈る儀式とか、あるいは現世で逆にそういう人たちから安らぎを得ることなど、生と死がしっかりつながっていることがわかる。

番組に登場する金菱教授は、幽霊の存在を信じていなかったが、東日本大震災後9年間の研究の結果として、生存者の視点で考えがちな復興問題を、亡くなった人たちの存在にも寄り添って見ていた点が非常に印象的だった。最後に金菱教授が出てきて番組全体が引き締まったのではないか。

ただ、ほかの取材相手と異なり、金菱教授のインタビューだけが英語字幕ではなく吹き替えになっていた。統一していないのは何か意図があるのか。

- まず映像と音楽がすばらしかった。特にオープニングの四季を表す映像は非常に芸術的ですばらしく、音楽も非常に効果的だった。バラカンさんのレポートとナレーションも非常によかった。長く日本に住んで日本文化への理解が深いことはもちろんだが、バラカンさんの落ち着いた人柄や、インタビューシーンにも相手に寄り添う姿勢がよくあらわれていた。

タクシー運転手の幽霊話も、NHKで取り上げるには少し疑問に思うだろうが、バラカンさんが非常に落ち着いたやりとりをしているので、その後のエピソードにうまくつながっていたのではないかと思う。

最後に登場した家族を亡くした方の話には心を打たれ、思わずもらい泣きしてしまった。また3月に放送したのはタイムリーで、非常にいい番組だった。

- 意欲的な番組として高く評価する。3.11にちなんだ死者に対する鎮魂の番組として理解したが、日本人としても、驚きとともに発見と感動があった。ただし、海外向けの放送であれば、東北のストーリーの特殊性のみならず、グローバルに共有できる普遍性にもう少し配慮されていればよかった。例えば、番組の導入部で、他国の鎮魂のストーリーを紹介して、日本のストーリーに入ると視聴者ももっと共感できると思う。
- とても楽しく感銘を受けながら見た。今回の死後の世界の概念そのものは特に東北や日本特有のものではない。死後の世界に関するさまざまなしきたりや儀式、お地蔵さんのような存在は世界中にある。この番組を日本語のできない外国人やあまり日本に関する知識もない海外の視聴者が見ることを想定するならば、死後の世界を東北ではこういうふうに見ているのだとか、その背景にある宗教観や文化、あるいはこのような歴史があったのだと、もう少し踏み込んで説明したほうがよい。そうすれば視聴者に景色がきれいだとか、かわいそうだという表面的な感想に終始せず、もう少し日本に対する興味や知識を深めてもらえる内容にできたのではないかと思う。
- 津軽のパートでは、2,000体以上のお地蔵さんの数だけではなく、その表情にも圧倒された。人形堂などよく取材されていると感じた。取材者の力量がよく表れている番組だった。シリアスだが日本文化を非常にわかりやすく伝えている番組でよかった。世の中では新型コロナウイルスのように、想像もつかないことが起こる場合がある。論理や科学が及ばないものを信じることや、人と人とのつながりの大切さを訴えることは今の時代に合っていると感じた。
- 生と死の問題はコロナ禍の中で実際に起こっていることで、非常に時宜を得た番組だと感じた。大変すばらしい秀逸なドキュメンタリーだ。

生きている人が死者と身近な関係にあったり、対話ができたり、あるいはそこから学ぶことができたりなど、東北の風土は他の地域の日本人にもなかなかわからないことだと思うので、大変大きな発見があった。すばらしい番組で、東北地方を知る非常に重要な番組だった。

東北の人はつらい経験をされたため、口が重くなる方もいると思うが、バラカンさんが出演したからこそ、比較的話してくれたのではないかと思う。そこが、この番組のカギのひとつだったのではないか。出演者の人選がよかったと思う。
- バラカンさんは非常によいキャラクターで、キャスティングが成功していたと思う。

(NHK側) この番組は年間2本制作しており、昨年の夏は、「Barakan Discovers TOKYO」を放送した。

震災の直後から、宮城県石巻市や岩手県大槌町など各地で幽霊を見たという人の話があり、バラカンさん自身、大変興味を持っていた。東北がどう復興していくのかについて、あえて幽霊の話の切り口にしながら日本人の死生観や、東北の歴史的背景を見ていきたいと思って取材した。

幽霊話や死生観はどここの国や地域の文化でも見られることだが、日本ならではのの特徴もある。海外のモニター視聴者からも日本独特の感性だと感じたという反応があった。

(NHK側) 幽霊の目撃談からあえて番組をスタートさせてようと思った決め手は2つあった。

1つは、外国の新聞社の東京支局長がこの心霊現象について書いた「津波の霊たち」という本だ。ノンフィクション作品としてイギリスで非常に大きな賞を取っている。それゆえに海外の人たちにもこの心霊現象は非常に関心が高いテーマだと感じた。

もう1つは、番組にも登場してもらった金菱教授との出会いだ。金菱教授は関西の出身だが、東北で生者と死者が共にあるとする考え方に非常に驚いた。教授自身は幽霊を信じていないと明言しつつも、震災直後から「震災学」という研究プロジェクトを立ち上げ、非常に真摯（しんし）に10年近く研究を続けている。金菱教授の協力も得られたので、東北における生者と死者の関係性を探っていけるのではないかと考えた。

なぜ阪神・淡路大震災の時には、幽霊の目撃談があまりなく東北であったのかは明確にはわからない。様々な方の話を聞くと、おそらく東北の風土の厳しさゆえ歴史的に不作や飢饉に見舞われることがあり、死がある程度身近な存在だったことも影響しているのではないだろうか。死者の数も相対的に多かったので、亡くなった人たちの力を借りて生き抜くという文化が育まれたのではないかと取材を通じて感じた。

なぜ、金菱教授だけ吹き替えになっているのかという質問だが、このシリーズは4本目で、これまでの3本では出演者の方は基本的に吹き替えにしていた。しかし今回は、東北の人たちの語り口や声の感触も重要な情報ではないかと考えた。そこで金菱教授のインタビューはわかりやすいように従来どおり吹き替えにしたが、東北の方たちの発言字幕にした。

< 「FACES How I survived being bullied」

1、# 2、# 12、# 35、# 41、# 42

(3月9日(月)～ 3月24日(火)ほか)について>

- いじめがこれだけ世界中に蔓延していることに驚かされた。いったい何が原因でいじめが生じるのか。過去の世代はどうだったのかといった率直な疑問が次々に湧いてきた。

この番組は、いじめられた子どもたちが同じような境遇にある子どもたちに希望を届けるのが目的だと思う。今回視聴した6本では、語られる体験もさまざま。ある日本人女性はいじめをソフトボールクラブの仲間と克服しただけでなく、現在は小学校教諭となり、過去の経験を生かして子どもに寄り添い手を差し伸べていた。非常に建設的で一貫した姿勢に強い感銘を受けた。

幅広い経験を共有することで救われる子どもは多いと思う。この番組は海外の公共放送との共同プロジェクトだと説明を受けたが、今回、視聴した6本以外には、何本くらい制作したのか。また、希望を届けるという目的が、どの程度この番組によって達成されているのか。

セルビア人女性の回では、白い背景と重なって字幕が判読しづらかった。画面に集中できず、話が追えなかった。特に視聴者が外国人である場合、メッセージを的確に伝えるための工夫が必要だと感じた。

- (NHK側) この番組はいじめに対して世界の放送局が手を組んで何かできないかと考えてスタートした。現在、日本を含め、12の国と地域から放送局が参加し、56本のエピソードが集まっている。

- 50本あまり制作されたそうだが、プロジェクトに参加した放送局がどのような基準で取材対象を決めているのか。放送局間での情報の共有などはあるのか。

- 取り組みとしては非常に意味がある素晴らしいことだと思った。いじめについて語るができる場ができたこと自体が素晴らしい。番組のウェブサイトで、ほかの放送回も見たが、それぞれの話には非常に聞き入るものがあった。

- いじめは国や地域を問わず普遍的な問題であることがわかり、ショックを受けた。いじめを取り上げる番組は重い内容になることが多いので、いじめられている側の人はいじめ側の人も見ないことが多いと思う。だがこの番組は短時間なので、何かの番組を見るついでに見てもらうことで、いじめられている人に対する助けとなったり、いじめ側の人に対する注意喚起、あるいはそれを横で見ている人たちの意識を高めたりするなどの役割も果たせるのではないかと思う。

- 6つのエピソードをまとめて見たので、様々な理由でいじめが発生するのだとわかったが、視聴者のなかには1つのエピソードしか見ないという場合もあると思う。いじめの原因がわかりにくいエピソードもあったので少し気になった。ただし、どのエピソードでも、最後には人のために尽くしたり、自分に自信をつけたりといった手立てでいじめから立ち直った話が盛り込まれていて、メッセージは効果的に伝わったのではないか。

- 非常にいい番組だと思った。いじめを克服した若者が自分の言葉でどのようにいじ

めを克服したかについて語っており、前向きなメッセージを送っていた。日本だけでなく、東南アジアでもいじめによる若者の鬱や自殺の割合が増えている。いじめを克服した人々が、悩んでいる若い世代に向けてメッセージを発するのは非常に重要だ。

この国際共同プロジェクトは、今後さらに多くの国と連携していく予定はあるのか。

- このような短時間の番組をまとめて制作することは、ネット時代において非常に効果的だ。ぜひ今後も取り組んでほしい。

今後についてだが、こういう普遍的な問題について、例えばSDGsとも関連づけて、さまざまな国の人々と協力していくべきだと思う。

- さまざまな国で共通するいじめ問題に直面した人たちが克服者として登場する、意味のある番組だと思う。しかし今後もこのような形で番組を作るのであれば、サイバーいじめの問題も絶対扱うべきだと思う。

学校でも、サイバーいじめについて対策をいろいろと検討しているようだ。子どもたちはサイバーいじめを日常の問題として抱えているが、今回はあまりその部分には触れられていなかった。

- とてもインパクトが強いすばらしい番組だった。1本だけでも強いメッセージ性が伝わってくる。番組の短さゆえの強みをもっとさまざまところで利用できるのではないか。その一方で、いじめをつらく感じて死にたいとまで考える子どもが、はたしてこの番組を見るだろうか、見る機会が提供されるのだろうかと考えた。そうであれば、視聴ターゲットが異なってくるのではないか。いじめられている子ども自身が見てくれればいいが、おそらく見ないだろうし、見る環境も気力もないかもしれない。その子たち自身ではなく、その周りの人たちがこれを見て、次の行動につなげてもらうことのほうが期待できる。そういうねらいの番組なのではないかと思った。

新型コロナウイルスによってアジア人への差別や偏見が世界各地で起こっている。それを考えながらこの番組を見ると、大人は何に対していじめを始めるのかがわかる。この番組では子どものいじめにスポットを当てているが、実は子どもたちが見ているのは大人の背中なのだというメッセージをもっと強く出してもいいのではないか。

- とてもよい番組で、これを見て励まされる人は多いと思う。差別と偏見の問題は、このコロナ禍の中で起こっていることでもありタイムリーだ。

この番組によっていじめられている若者たちが励まされることも重要だが、むしろそういういじめとは無関係な、あるいは無意識、無関心な人たちに自覚を促す効果がある番組だと思う。いじめとは無関係な立場にいる多くの人たちが、いじめについて学ぶところに、この番組の重要性があると思う。

(NHK側) 国内放送ではいじめ問題に長年取り組んできた。Eテレには「いじめをノックアウト」プロジェクトがあり、そこで取材したインタビューが非常に優れたものだったので、これを世界に向けても発信していきたいと考えて英語化した。NHKが旗を振り、できるだけ多くの国や地域の公共放送に参加してもらうことを考えた。いじめられている人だけでなく、自分は

いじめとは無関係だと思っている人たちにも見てもらいたいと考えている。

去年、NHKが主催する教育コンテンツの国際コンクール「日本賞」で特別賞を受賞するなど、外国の審査員からも高い評価を得た。

(NHK側) この番組は、企画が立ち上がった当初からABU（アジア太平洋放送連合）、EBU（欧州放送連合）、南米の放送局連合であるTALと協力してきた。どのような演出で、どのくらいのサイズの番組を制作すれば、ターゲットにリーチできるかなど、海外の放送局のプロデューサーたちと相談しながら制作した。ABUやEBUを通じて参加局を募っている。ただし、それぞれの放送局の事情やタイミングもある。引き続きさまざまな国や地域の放送局に声をかけていくつもりだ。

また現在ユネスコなどと連携する道も探っている。このように世界中の放送局が協力して進めているプロジェクトなので、いじめの被害を減らすために、この番組をさらに活用していきたい。